

静岡県内の「日本語指導が必要な児童生徒」に対する教育支援：

静岡県版日本語初期指導カリキュラムとDLAの普及に向けて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢崎, 満夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008953

静岡県内の「日本語指導が必要な児童生徒」に対する教育支援

—静岡県版日本語初期指導カリキュラムとDLAの普及に向けて—

矢崎 満夫*

【要 旨】

静岡県内の公立学校には、外国籍や国際結婚家庭等の「日本語指導が必要な児童生徒」が数多く在籍しており、地域によっては大きな教育課題の1つとなっている。本プロジェクトでは、筆者が中心に開発した静岡県版日本語初期指導カリキュラムと、文科省による日本語能力測定ツール（DLA）の普及に向けて、浜松市教育委員会との共催による研修会を開催した。本稿では、2013年度に実施した当該プロジェクトについての報告を行う。

キーワード：日本語指導が必要な児童生徒 静岡県版日本語初期指導カリキュラム 特別の教育課程 DLA

1 はじめに

文科省の2012年度調査によれば、静岡県内の公立学校に在籍する「日本語指導が必要な外国人児童生徒」の数は全国第3位の約2500名とされており、外国人児童生徒や近年急増する国際結婚家庭の子どもも含めた、「日本語指導が必要な児童生徒」に対する指導のあり方は、今日の県内学校現場における重要な教育課題の1つとして注目されつつある。そうした中、筆者は静岡県教育委員会からの依頼を受け、2011年度には静岡県版日本語初期指導カリキュラム『はじめての日本語とクラスの仲間づくり』を開発し、2012年度にはその内容に基づくDVD映像資料を作成した。

また、文科省は『特別の教育課程』による日本語指導を2014年度から施行するのにあわせて、新たな日本語能力評価方法の考案を東京外国語大学の教員グループに委託し、2012年度末には

「Dialogic Language Assessment」（以下、DLA）が開発された。筆者も当該グループに加わり、評価法開発のための研究推進委員の1人として3年間に渡り活動してきたが、2013年度末にはDLAの完成版が文科省ウェブサイトに掲載されるに至

った。

以上のような状況を踏まえて、本プロジェクトでは、県内において「日本語指導が必要な児童生徒」に対するより効果的な教育支援を推進していくことを目的として、浜松市教育委員会との連携を図りながら、学校教員・日本語支援員・地域ボランティア等を対象に、『はじめての日本語とクラスの仲間づくり』（DVD映像資料を含む）及びDLAの普及を目指して、関連情報の提供を行う研修会の開催を企画・実施した。

本稿では、2013年度に展開した当該プロジェクトについての報告を行う。

2 「静岡県版日本語初期指導カリキュラム」「特別の教育課程」及び「DLA」について

2-1 静岡県版日本語初期指導カリキュラム『はじめての日本語とクラスの仲間づくり』

当該カリキュラムは、静岡県教育委員会（以下、県教委）からの「県内の学校が日本語のわからない児童生徒のためのプレクラスを設置する際に有用となる、日本語初期指導用カリキュラムを作成したい」という要望に応え、筆者が県教委の指導主事（当時）の協力のもとに開発したものである。

2011年3月に試作版ができあがり、翌年3月には

* 教職大学院

完成版を発行して、県教委のウェブサイトにも掲載した。また、2013年度には当該カリキュラムを紹介するためのDVD映像資料を作成した。

当該カリキュラムでは、突然来日した日本語がわからない子どもたちは、「国・地域・学校・先生・友人・日本語・教科・生活習慣・文化等、様々な環境とのつながりを失った状況にある」ととらえ、まず「子どもたちとクラスの仲間との間につなぐの糸を紡ぐ」ことを目標とした。基本的に4週間のプレクラス（＝在籍クラスに入る前に日本語初期指導を実施する特別クラス）で使用するものとし、外国人児童生徒担当教員や教育委員会派遣の指導員、地域のボランティア支援者等を指導者として想定した。この4週間という限られた期間においては、まず在籍クラスにおける「仲間づくり」支援を推進し、当該児童生徒が過ごしやすい環境を整備していくことこそが、最重要のテーマであると考えた。

当該カリキュラムの内容と主な使用教材は、以下のとおりである。

- | |
|--|
| <p>I サバイバル表現（生活基本語彙）＜使用教材：『日本語学級1』（凡人社）＞</p> <p>II ひらがな文字表記・発音・語彙＜参考教材：『ひろさんのたのしいにほんご1 ひらがな・かたかな・かんじれんしゅうちょう』（凡人社）＞</p> <p>III 日本の学校文化＜使用教材：『にほんごをまなぼう』（文科省）／『ともだちになろう！』（静岡県教育委員会・静岡大学）＞</p> <p>IV 友人関係構築支援＜参考資料／使用教材：「ソーシャルスキル学習を取り入れた日本語支援シラバス」（矢崎 2004）／『こどもにほんご宝島』第7話「こんなとき、何て言う？」（アスク出版）＞</p> |
|--|

また、当該カリキュラムの特徴として、①初期指導のための多様なアクティビティの紹介 ②在籍クラスの児童生徒との交流給食及び在籍クラスにおいて担任教員が行う3つの学活授業の提案

③当該児童生徒の母語や母文化に対する配慮 の3点を挙げておきたい。特に上記の②③には、当該児童生徒と日本人児童生徒との出会いによって双方の変容を促し、多文化共生を念頭に置いた新しい教育の創造をめざすという理念が含まれている⁽¹⁾。

2-2「特別的教育課程」による日本語指導について

これは正式には「学校教育法施行規則の一部を改正する省令等の施行について」として、2014年1月14日に文科省から通知されたものである。当該通知文の冒頭には以下のような文面が記されている。

「今回の改正は、国際化の進展に伴い、我が国の義務教育諸学校において帰国・外国人児童生徒等に対する日本語指導の需要が高まっていることを踏まえ、当該児童生徒に対する日本語指導を一層充実させる観点から、当該児童生徒の在籍学級以外の教室で行われる指導について特別的教育課程を編成・実施することができるよう制度を整備するものです。」

この施行によって、今後、義務教育諸学校における日本語指導は、新たな体制整備を検討していく必要が生まれた。以下、文科省ウェブサイト「義務教育諸学校における日本語指導の新たな体制整備について」⁽²⁾をもとに、そのポイントについてまとめる。

○背景

- ・定住外国人の増加に加え、保護者の国際結婚の増加、日本生まれの外国人児童生徒の増加などによる、日本語指導が必要な児童生徒の増加
- ・地域における指導・支援体制のばらつき

○制度の概要

- ①指導内容：児童生徒が日本語で学校生活を営み、学習に取り組めるようになるための指導

- ②指導対象：小・中学校段階に在籍する日本語指導が必要な児童生徒
- ③指導者：日本語指導担当教員（教員免許を有する教員）及び指導補助者
- ④授業時数：年間10単位時間から280単位時間までを標準とする
- ⑤指導の形態及び場所：原則、児童生徒の在籍する学校における「取り出し」指導
- ⑥指導計画の作成及び学習評価の実施：計画及びその実績は、学校設置者に提出

○制度導入の効果

- ・児童生徒一人一人に応じた日本語指導計画の作成・評価の実施 → 学校教育における日本語指導の質の向上
- ・教職員等研修会や関係者会議の実施 → 地域や学校における関係者の意識及び指導力の向上
- ・学校教育における「日本語指導」の体制整備 → 組織的・継続的な支援の実現

2-3 DLA (Dialogic Language Assessment) について

DLA とは、「日本語指導が必要な児童生徒」の日本語能力を測定するための「対話型アセスメント」のことである。

以下、文科省が発行した『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント DLA』^③をもとに、その概要についてまとめておく。

○DLA 開発の背景

「日本語指導が必要な児童生徒」とは、日常会話ができない児童生徒だけを指すのではなく、日常会話ができていても学年相当の学習言語能力が不足し、学習活動への参加に支障が生じている児童生徒も含む。外国人児童生徒の学習言語の力は年齢だけでなく、滞日年数、来日年齢、母語発達レベルの影響を受けるため、画一的な学年別テストで把握することは困難である。子どもの日本語能力

をどのように把握するのかを検討し、その方法としてこのDLAを作成した。

○DLA のねらい

主に、日本語による日常会話はできるが、教科学習に困難を感じている児童生徒を対象とする。子どもたちの言語能力を把握し、どのような学習支援が必要であるかを検討する際の参考となる情報を得ることをねらいとする。

○DLA の特徴

一番はやく伸びる会話力を用いて、一対一の対話で教科学習に必要な言語能力を、「話す」「読む」「書く」「聴く」の4つの面から把握する。また、テストの実施過程も、子どもにとっての学びの機会として捉える。

○DLA の構造

「はじめの一步」「話す」「読む」「書く」「聴く」の5つの評価ツールがある。1回ですべてを実施するのではなく、子どもの状況に合わせて把握したい力を考えて、評価ツールを選ぶ。

図1は、DLAの全体像を示したものである。まず、「JSL評価参照枠」を参考に、日頃の観察により子どもが大体どのステージにあるかを予測する。「JSL評価参照枠」とは、日本語能力の発達段階を6つのステージに分けて、総合的・多面的に記述したもので、在籍学級参加との関係から、支援の段階を示している。当該参照枠は図2で示した＜全体＞以外に、＜技能別＞も用意されている（後述）。必ず初めに「はじめの一步」で「導入会話」と「語彙力チェック」を行ってから、「話す」のアセスメントを行うこととしている。その後は子どもや学習における必要度に応じて、「読む」「書く」「聴く」を適宜実施していく。そしてそれぞれの評価実施後には、その結果を踏まえてステージを判定する。

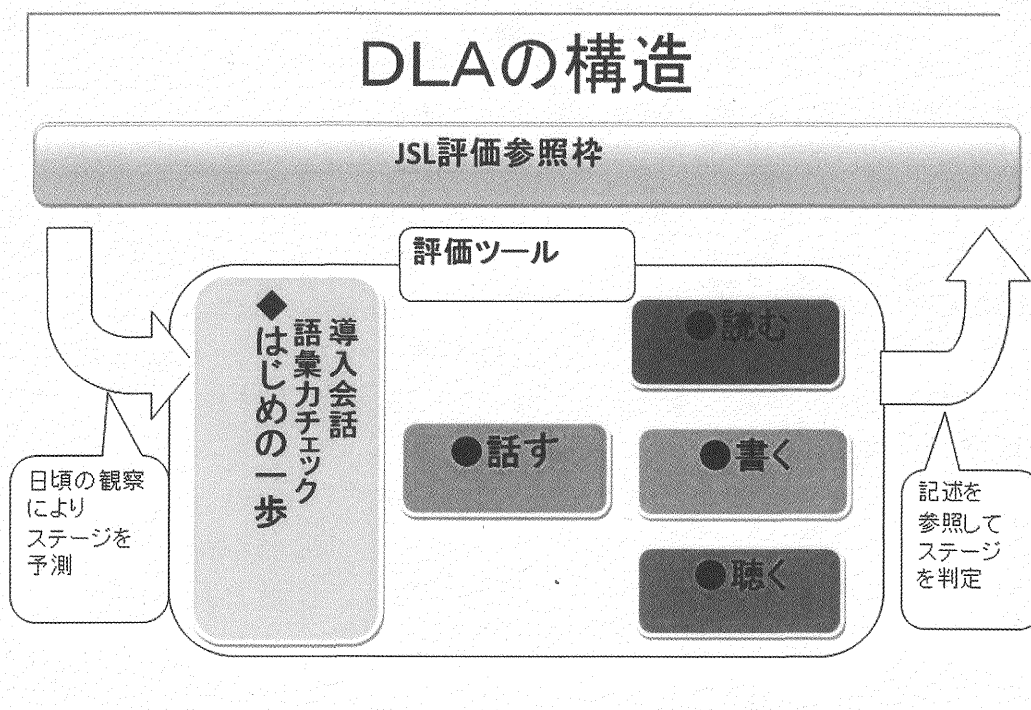


図1 DLAの全体像

ステージ	学齢期の子どもの在籍学級参加との関係	支援の段階
6	教科内容と関連したトピックについて理解し、積極的に授業に参加できる	支援付き 自律学習 段階
5	教科内容と関連したトピックについて理解し、授業にある程度の支援を得て参加できる	
4	日常的なトピックについて理解し、学級活動にある程度参加できる	個別学習 支援段階
3	支援を得て、日常的なトピックについて理解し、学級活動にも部分的にある程度参加できる	
2	支援を得て、学校生活に必要な日本語の習得が進む	初期支援 段階
1	学校生活に必要な日本語の習得がはじまる	

図2 JSL 評価参照枠＜全体＞

○DLAの実践

DLAが取り入れた「対話型」の評価は、通常の筆記テストでは測ることが難しい子どもの力を相手に合わせた話し合いを通して引き出すものである。DLAを実践するときには、基本的には①「評価用キット」を用いながら、「実践ガイド」に書かれたとおりに発話する(図3、4)②録音した

ものや子どもが書いたものをもとに「診断シート」に評価を記入する(図5)③診断シートをもとに、JSL 評価参照枠<技能別>でステージを検討する(図6)という手順で進めていく。そして最後にもう一度JSL 評価参照枠<全体>で、その子どもの力を総合的に判定する。なお、一連の判定は複数の関係者で行うことが重要であるとされている。

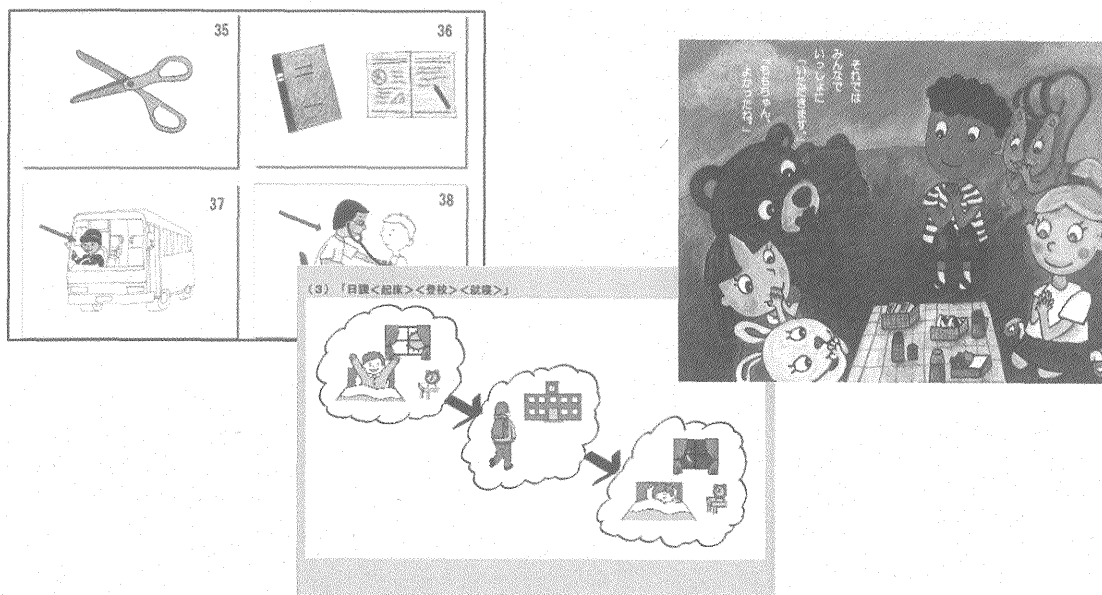


図3 評価用キット

実践ガイド「導入会話」

第2章「DLA(はじめの一步)」

導入会話

① 初対面のあいさつ:
 ☺ こんにちは。私は、(自己紹介)です。

② 説明: これからすることを子どものやる気が増すように楽しく説明する。
 ☺ 「これから、○○さん/くんが日本語でどのくらいお話ができるか知りたいです。わかることは何でも話してください。わからないときは、「わかりません」と言ってください。いいですか」

③ 質問:
 ・次の順番で質問を進める。
 ☺ ①「名前を教えてください/名前は何か」
 ②「何年生ですか」
 ③「何歳ですか/いくつですか」
 ④「誕生日はいつですか」
 ⑤「お兄さん/お姉さん(弟・妹)がいますか」
 ・兄弟姉妹については、個々の子どもの状況や家族構成などに応じて柔軟に対応する。

☺ ⑥「友だちがいますか」
 ⑦「友だちの名前を教えてください」
 ⑧「友だちとどんなことをして遊びますか」

図4 実践ガイド(例「導入会話」)

診断シート W1「動物」

名前： _____ (男・女) 学年(所属)： _____ 年 月 日

字数： _____ 語彙： _____ 分

・子どもの作文を見て、あてはまる評価点(5・3・1)に○をつける。
 中間を選択し、2点、4点をつけてもよい。
 ■評価基準■ 5：とてもよい 3：ふつう 1：もう少し

内容			
1	内容の豊かさ	くわしく書ける	5 3 1
語彙・漢字力			
2	語彙の多様性	いろいろな語彙を使って書ける	5 3 1
書字力・表記ルール			
3	ひらがな	拗音、促音、長音などが正しく書ける	5 3 1
4	カタカナ語	カタカナ語が書ける	5 3 1
書く態度			
5	意欲と取り組み方	積極的に取り組める	5 3 1
6	書く前の準備	絵を描いたり、書くことを考えたり相談したりしてから書き始める	5 3 1
総合評価			
備考(母語の状況)		総合得点	点
		平均点	点
		/ 6 ⇒	点

図5 診断シート(例「書く」)

ステージ	読解力	読書行動	音読行動	語彙・漢字	読書習慣・興味・態度
6	☐ 年齢相応の読み物を読んでよく理解できる	☐ より深く理解するために必要な様々な読解方略(予測・推測、関連づけ、読み返し等)を効果的に使うことができる	☐ 文や意味のまとまりに区切りながら、流暢に読める	☐ 年齢相応の語彙や漢字がよく理解できる	☐ 年齢相応の本や読み物を選んでたくさん読む習慣がある
5	☐ 年齢相応の読み物を読んで、大まかに理解できる	☐ 理解するために必要な読解方略をある程度使うことができる	☐ ややゆっくりではあるが、だいたい文や意味のまとまりに区切って、読める	☐ 年齢相応の語彙や漢字がある程度理解できる	☐ 年齢相応の本や読み物がある程度読む習慣がある
4	☐ 1つ下の年齢相応の読み物を読んで、大まかに理解できる。	☐ 支援を得て、理解するために必要な読解方略をある程度使うことができる	☐ 安定して、文節や単語に区切って読める	☐ 1つ下の年齢相応の語彙や漢字が理解できる	☐ 1つ下の年齢相応の本や読み物を読む習慣がある
3	☐ 2つ(または3つ)下の年齢相応の読み物を読んで、大まかに理解できる	☐ 支援を得て、理解するために必要な読解方略を使い始める	☐ ゆっくりではあるが、だいたい文節や単語に区切って読める	☐ 支援を得て、2つ(または3つ)下の年齢相応の語彙や漢字がある程度理解できる	☐ 支援を得て、2つ(または3つ)下の年齢相応の本や読み物を読む
2	☐ 普段よく目にする身の回りの簡単な単文が理解できる	☐ 文字の読み間違いに気づく	☐ 文字習得が進む	☐ 身の回りの語彙を聞く、または、読んで、理解できる	☐ 支援を得て、興味のある読み物や身の回りの書かれたものを読もうとする
1	☐ 身の回りのよく知っている語彙を読んで、理解できる	☐ 文字と音との対応ができる	☐ 文字習得がはじまる	☐ 身の回りのよく知っている語彙を聞く、または、読んで、理解できる	☐ ごく短い読み物や書かれたものに興味を示す

* 年齢相応と読み物のレベルとの関係は、本章5節の【テキストの対象年齢】を参照してください。

図6 JSL 評価参照枠<技能別>(例「読む」)

3 浜松市教育委員会との連携による研修会の開催

3-1 浜松市教育委員会との連携について

本プロジェクトを実施するにあたっては、浜松市教育委員会（以下、浜松市教委）を連携先に選び、進めていくことにした。同市は県内でも圧倒的に「日本語指導が必要な児童生徒」の数が多く、当該研修会に対するニーズが非常に高かったことがその大きな理由である。

3-2 研修会講師と担当内容について

特にDLAに関しては、東京外国語大学の教員を中心とした研究グループがその開発に携わったことから、当該グループの開発メンバーを本研修会の講師として招き、DLAの詳しい説明とワークショップを行っていただくことにした。ただし、時間的・予算的な制約から、2012年度は研修会を2回の実施とし、DLAの中の「はじめの一步」「話す」及び「読む」の3つのみを取り上げることにした。

筆者による静岡県版日本語初期指導カリキュラムの紹介は、「在籍クラスと支援クラスとの連携」という視点を取り入れ、教科学習支援のあり方も交えながら、2つの研修会ともに実施した。

3-3 研修会の概要

3-3-1 日時及び場所

2回の研修会の日時と場所は以下のとおりである。これらの設定はすべて浜松市教委が行った。

○第1回研修会

2013年11月30日（土）午前9時30分から
午後4時30分 浜松市教育センター

○第2回研修会

2014年2月15日（土）同上

3-3-2 参加者

参加者の募集は浜松市教委が行った。2回の研修会ともに参加者は外国人児童生徒教育担当他の教員とボランティア団体等の日本語支援者、浜松

市教委の関係者（相談員含む）であった。なお、実施日が土曜だったこともあり、参加はすべて希望制となった。参加者数の内訳は以下のとおりである。

○第1回研修会

教員13名・ボランティア支援者10名・浜松市
教委関係者7名 合計30名

○第2回研修会

教員19名・ボランティア支援者10名・浜松市
教委関係者8名 合計37名

3-3-3 研修会の主な内容

筆者及びDLA開発メンバーによる研修会の主な内容は、以下のとおりである。

○第1回研修会

- ・「日本語初期指導カリキュラム及び在籍クラスと支援クラスとの連携について（1）」
- ・「DLAの概要」
- ・「DLA『はじめの一步』（導入会話・語彙力チェック）」
- ・「DLA『話す』（実施方法から診断方法までのワークショップ）」

○第2回研修会

- ・「日本語初期指導カリキュラム及び在籍クラスと支援クラスとの連携について（2）」
- ・「DLA『読む』（実施方法から診断方法までのワークショップ）」

3-4 参加者からの評価

各研修会終了後には、参加者に浜松市教委が用意したアンケート調査に回答してもらった。回答が得られた参加者からの研修会内容の満足度（4段階評価）は、次のとおりであった。この結果からは、全体的に研修会に対する満足度は高かったことがうかがえる。

○第1回研修会

大変満足 14 人・概ね満足 7 人・やや不満 0 人・
不満 0 人（回答数 21）

○第2回研修会

大変満足 21 人・概ね満足 12 人・やや不満 0 人・
不満 0 人（回答数 33）

次に、アンケートの自由記述部分から、各研修会の内容ごとにその主な感想を挙げてみる。希望参加ということもあり、全体的な印象としては熱心な受講生が多かったように感じられ、出てきた感想からも、多くの学びが得られていたことが推察された。

○第1回研修会

＜「日本語初期指導カリキュラム及び在籍クラスと支援クラスとの連携（1）」について＞

- ・冊子がとても具体的で参考になりました。在籍学級との関わり大切さを改めて感じた。在籍の先生との連絡をもっと密にとっていきたい。

（教諭）

- ・在籍クラスへのソフト・ランディングのために、給食を利用するという考え方が新鮮だった。支援クラスの担当ばかりが頑張るのではなく、在籍クラスの担任にも頑張ってもらい、連携した支援をしていくために、こうした例示がされることはとてもありがたい。（教諭）
- ・在籍学級との連携をすることにより、外国人児童だけでなく日本人児童にとってもかけがえない体験をさせるところが素晴らしい。（教諭）
- ・概要をコンパクトにわかりやすく説明してくださってよかった。対象となる外国人児童生徒だけでなく学級全体への指導、受け入れ体制づくりが大切とお話やその具体的なカリキュラムも示していただいてよかった。外国人児童生徒や帰国児童生徒を、単に特別な支援が必要な存在と捉えるだけでなく、集団全体が成長するためのリソースとしても生かしていけるようになってきたらよいと改めて感じた。（教頭）

- ・支援クラス・交流給食・在籍クラスへの段階を踏むことは不安が大きく軽減されることと思われる。在籍クラスでは担任による他児童への国際理解教育が行われることがこのカリキュラムのポイントだと思った。在籍クラスと支援クラスの連携が言われ始めて久しいが、なかなか実現できないのが実情。これを機に実現の方向に向かうのを切に願う。（ボランティア支援者）

- ・在籍クラスと支援クラスとの連携の大切さは、日頃から感じている大きな課題。外国につながる子どもを受け入れているすべてのクラス担任の先生にも聞いていただきたい内容だった。このDVDがあれば短時間で理解いただける内容なので、校内研修に取り入れていただけないかと思う。国語だけでも「学習単元全体を見通した個別の指導計画の立案」が各学校に浸透すれば、支援の効果が今以上に上がるということを確認した。放課後学習での先取り支援とあわせ、実現に向けて学校や先生方に働きかけてほしい。（ボランティア支援者）

＜「DLAの概要」について＞

- ・母語の重要性を改めて考えさせられる話だった。DLAについて、初めて詳しい話を聞いた。（教諭）
- ・割合話せる子の日本語理解を測っていた。大切なことではあるが、測るのに膨大な時間がかかり、人数が多いとなかなか測れないので、そこが問題だと思う。（教諭）
- ・外国人児童生徒が持ち込む、言語・文化を大事な日本の言語資源ととらえる考え方は新鮮。彼らの自尊感情やアイデンティティを大事に考えてそれらを育てる言葉をかけていきたい。DLAは日本語と母語の両方を測ることができる点、会話を通して子どもの背景や今後の日本語習得の見通しができる点が素晴らしい。（ボランティア支援者）
- ・「話す力」を3面からとらえているところ、子どもの発話を量的・質的の両面から判断すると

ころ、テストの発話が限定されているので公平性が保たれるところがとても良い。点数化する際はテストによって評価が異なるため、複数の評価が望ましい。ただ、現実問題として在籍校での実施は難しい。(ボランティア支援者)

＜DLA「はじめの一步」及び「話す」について＞

- ・実際の場面のビデオを視聴することで、イメージがしっかりと持てた。評価についても実例をもとにやってみることができたのが大変参考になった。大切なのは、点数をつけるのではなく、支援者がその子の日本語能力について共通理解をすることだとのお話もあったので、DLAの目的をしっかりと踏まえて活用できればと思う。(教頭)
- ・講師の先生の話聞いて、DLAに対するイメージが大きく変わり、実際に試してみたい気持ちが膨らんだ。自分で試したり、実践の様子を見たりすることができたので、DLAが身近に感じられるようになった。量的評価はできたが、質的評価が難しかったため、質的評価の指標が必要だと思った。(教諭)
- ・実施手順や留意点が細かく決められているので、誰でもすぐに実践できそうなところがよいと思った。評価を複数の人が行うことで、実施者の不安も軽減すると思った。評価方法については、質的評価がやや難しいと感じた。子どもの日本語到達点をクラス担任や支援者とあらかじめ話し合い、決めておく必要があると感じた。(ボランティア支援者)
- ・対象者の目の前で記録するのではなく、レコーダーに記録していくことで評価を受けている子どもたちに緊張感を与えず、ありのままの力を見ることができ点がよい。評価の内容が最初にインタビューをしてコミュニケーションをとり、その後、語彙・基本の会話力・会話の応用力を順番に見ていく形式になっており、どの部分の力が弱いのか、よく評価できると思う。実際に評価の一部をやってみたら、シナリオが出来

上がっていて、手順に沿って進めるだけなので、手際よくできた。評価の度に違う言葉を使うこともないので、毎年追跡評価をしても正確に結果を記録していけると思った。(ボランティア支援者)

- ・テスト形式が明確でわかりやすい。ただ、判定には主観が入ってしまうのではないかと。(浜松市教委・相談員)

○第2回研修会

＜「日本語初期指導カリキュラム及び在籍クラスと支援クラスとの連携(2)」について＞

- ・主な教材教具やアクティビティが参考になりました。「連携を基盤とし、学びをつなぐ」「自信をつけさせる」「発達支援と同じ考え方」等の話があり、これまでの自分の考え方でいいのだと安心し、自信になりました。担任にこそ是非聞いてほしい話でした。(教諭)
- ・連携がうまくいけば、在籍学級で活躍できる場も増え、成就感や達成感を味わわせることができ自信につながると思いました。ただ、中学の場合、生徒指導や部活指導等で学級担任や教科担任との打合せ時間が十分にとれないのが実情です。(教諭)
- ・国語科の支援において、在籍学級との連携により、単元ごとに計画を立てることの必要性を改めて感じました。週に1度しか支援に行けない学校もある中で、計画のすり合わせには困難も予想されます。できれば、学級(教科)担任の先生から、「ここをこのように…」とご提案いただけると有難いと思いました。NPOにできることとして、国語科の年間指導計画を読み込むことから始めようと決意を新たにすることができました。(ボランティア支援者)

＜DLA「読む」について＞

- ・聞く場合と自分で読む場合の理解の具合、またその原因、対応方法などが、日頃の1.5世代への指導方法のヒントになった。実施することが

その子への指導につながると感じた。具体的な指導方法については多くの方と研修を積みたい。
(教諭)

- ・「話す」よりも、実施は難しいと感じた。実施者が読み物教材を理解し内容を頭にたたき込む必要があるため、学年が上がれば上がる程、実施時間がかかると思われる。まずは、実践して慣れていくことが必要だと思う。(主幹教諭)
- ・対話によって読み取った内容等の引き出しをするのは難しいと感じた。教師の言葉かけで「もっと話したい」となるように、教師自身のスキルアップが必要だと思う。このDLAを実施することで教師のスキルアップも図れる可能性を感じた。(浜松市教委・相談員)
- ・子どもと接するとき、徹底して「否定しない、訂正しない」という姿勢は、実はとても難しいと思います。でもこのやり方でいつも子どもと読書をしたら、子どもは間違いなく読むことが好きになり、やがて、自ら本を手取るようになり、それが学習する力に結びつくのだらうと思いました。(ボランティア支援者)
- ・児童生徒の多読へとつなげることが目的と知り、実施後の支援が明確でスムーズに行けそうだと感じた。また、読解ストラテジーや読書・音読行動も児童生徒の読書力を測る大切な要素だと知り、今後の支援に生かしていこうと思う。(ボランティア支援者)
- ・DLA「読む」により、日本生まれの子どもたちの低学力問題の解決につながるのではないかと、少し明るい気持ちになりました。一方で、評価に適した教材が数多く必要だと思いますが、特に中学生で漢字が読めない場合、使える教材が少ないのではないかと思います。漢字が読めないために、4つも5つも下の学年の読み物を与えることになってしまいます。振り仮名が振ってあるという条件付きで読書力を測ることは可能でしょうか。(ボランティア支援者)

4 2014年度の取り組みと今後の展望

以上述べてきた2013年度の当該プロジェクトの成果を踏まえ、2014年度には東京外国語大学研究グループの協力によって、DLA「聴く」及び「書く」を主な内容とする、同様の研修会を2回実施することができた。2年間を通して静岡県版日本語初期指導カリキュラムと在籍クラスと支援クラスとの連携のあり方、DLAの5つの評価ツールのすべてを浜松市において提供することができたといえる。浜松市はその後東京外国語大学の研究グループの協力を得ながら、DLAの普及に努めている。今後の浜松市におけるさらなる発展を期待しつつ、県内他市においても同様の取り組みが行えないか、検討していきたいと考える。

【注】

- (1)当該カリキュラムの詳細については、矢崎(2012)を参照のこと。
- (2)http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2014/01/14/1343186_1.pdf (文科省 HP)
- (3)「JSL対話型」の「JSL」とは「Japanese as a Second Language」の略で、「第二言語としての日本語」を表す。

【引用・参考文献】

- 文部科学省(2014)『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント DLA』
- 矢崎満夫(2012)『『はじめての日本語とクラスの仲間づくり』－「つながり」を主題とした静岡県版日本語初期指導カリキュラムの開発と普及』『静岡大学教育実践総合センター紀要』20号 pp265-275
- 矢崎満夫(2004)「外国人児童と日本人児童とのインターアクションのための日本語支援－教室内ネットワーク形成をめざしたソーシャルスキル学習の試み－」『日本語教育』120号 日本語教育学会 pp103-112